

英語学習者のストーリーテリングにおける指示表現の実証研究：センタリング理論を分析の手がかりとして

An Empirical Study of Referential Expressions in the Storytelling of English Learners: Based on the Centering Theory

谷村 緑 大阪外国語大学大学院

Abstract

This study investigates English learner use of referential expressions based on the Centering Theory, which is a model of cohesion and salience that is said to constrain the surface form of certain noun phrases in processing utterances. The main questions addressed are: (1) how the learners create coherence, (2) how the learners distribute referential expressions and (3) whether the way the learners use referential expressions differ from native English speakers and native Japanese speakers. Fifty willing participants were asked to tell a story of Momotaro looking at a sequence of pictures, and the data recorded were transcribed. The results show that the way English learners create coherence differs between English and Japanese speakers. Even advanced learners have difficulty creating coherence smoothly. In addition, the choice of the surface form (nouns and (zero) pronouns) by English learners has similar tendencies with native Japanese speakers. In particular, beginners transferred features of spoken Japanese into their speech, and employed referential expressions inappropriately. We need to look more closely at the data qualitatively rather than quantitatively.

KEY WORDS : 指示表現 (referential expressions)、一貫性(coherence)、ストーリーテリング(story-telling)、センタリング理論(Centering Theory)

1. 先行研究及び本研究の目的

日常の言語活動において、話し手は聞き手の解釈を促すために既に導入済みの情報を後続の談話の中では異なった言語表現(固有名詞/名詞、代名詞、ゼロ代名詞)で指し示すことがある。このような同一の指示対象を指す表現は指示表現と呼ばれる。

英語学習者のストーリーテリングにおける指示表現の実証研究：
センタリング理論を分析の手がかりとして

従来の言語学的視点からの研究には、指示表現の出現頻度が一貫性(まとまりの程度)を示すとするHalliday and Hasan(1976)や、テキストにおける主題の連鎖に注目し、指示表現の選択要因の解明を目指すGivón(1983)がある。この選択要因とは、①照応詞と先行詞との間の節の数、②他の指示対象の干渉によって同定を間違える可能性、③ある名詞句が導入されてからトピックとしてどれだけ持続するか、というものである。

しかし、指示表現の出現数が少なくとも、まとまりが良いと感じられる発話を我々は経験的に知っており、一貫性と出現頻度は必ずしも相関関係にあるわけではない。又、従来の研究は、談話(文章)は一貫性の高いものであるという前提に立っているため、一貫性の低い発話、言い換えると、伝わりにくい発話という問題を扱うことはできない。

表 1 第二言語における指示表現の習得研究

研究者	対象	方法	結果
Fuller and Gundel (1987)	中級の多国籍の大学付属語学学校生 (全20名) 年齢不明	無声映画を見た後 ストーリーを語る	中間言語の言語獲得のある段階では、母語にかかわらず、ゼロ照応を多用する。
Williams (1988,89)	上級の中/マレー/タミール話者(全12名:ペア6組)年齢18-45	自由な会話	経済性のためと運用能力未発達のために、ゼロ照応を多用する。
Tomlin (1990)	上級のアラビア/西/韓/中国語話者 (全30名) 年齢20才前半	コンピューター画面の絵の連続を見る ストーリーを語る	確実に内容を伝え、聞き手の理解を完全にするための方略として名詞形の照応を多用する。
Chaudron and Parker (1990)	初級/中級/上級の日本語話者 (大学付属語学学校生、全30名) 年齢不明	4コマ漫画を見て ストーリーを語る	コンテキストにより、名詞形と代名詞形の使い分けが可能。有標性の高い用法ほど習得が遅れる。
Hartford (1995)	上級のネパール語話者 (数不明) 年齢不明	新聞、TV、ラジオなど	母語の影響とcode化の必要性低いため目的格でゼロ照応を多用。

表 1 の第二言語の先行研究は、上記の問題点を抱えた言語学の研究を前提としているため、名詞と(ゼロ)代名詞の overuse と underuse の比較、つまり

JACET関西紀要 第7号

先行詞を名詞で受けるかそれとも(ゼロ)代名詞で受けるのかの数の比較分析にとどまっておらず、一貫性が考慮されていない。又、どのような言語形式が使用されたのかといった学習者のとった方略に対する考察が不十分となっている。

本研究では、以上の問題点を踏まえ、トピックのつながりの質を示す、定量的測定が可能なセンタリング理論を分析の手法として用い、ストーリーテリングにおける(1)一貫性の構築と(2)指示表現の形式選択の2点について、英語話者と日本人英語学習者との比較を行い、共通点と相違点について考察する。参考として日本語話者の発話も扱う。

2. 調査方法

2.1. 被調査者ⁱ

	初級学習者	中級学習者	上級学習者	英語話者	日本語話者
総数	10	10	10	10	10
年齢	10代後半～ 20代前半	10代後半～ 20代前半	10代後半～ 30代前半	10代後半～ 30代前半	10代後半～ 20代前半
TOEIC	200～300点	400～500点	700～800点	-----	-----

英語学習者は、関西の英会話学校の学生で、プレースメントテスト(四技能テストの総合点数)の結果に基づいて6段階にレベル分けされている。上位から1番目、3番目、5番目のレベルの学習者が調査に参加した。TOEICの点数は、その同じレベルの学習者で、TOEICの授業を受けている者の平均的な点数を示す。日本語話者は同じ英会話学校の学生で、英語の調査には参加していない。英語話者は、イギリス、アメリカ、カナダ、ニュージーランドを国籍とする英会話学校教師、日本の大学への短期留学生である。ⁱⁱ

2.2. 調査の手順

被調査者は昔話「桃太郎」ⁱⁱⁱの絵(全15枚)を見、準備ができた時点でストーリーを語るよう指示された。テープに声を録音することはあらかじめ知らされていた。語る長さに関しての制限は与えなかった。録音した発話は、以下に挙げる Chafe (1980:301)を参考に文字化した。

,	Clause-final level or rising intonation
/X/	X may not be an accurate transcription
ay	Indefinite article pronounced to rhyme with "say"

英語学習者のストーリーテリングにおける指示表現の実証研究：
センタリング理論を分析の手がかりとして

thee	Definite article pronounced to rhyme with “see”
--	lengthened segment as in “U—m”
[P]	Pause
()	Researcher’s comments (e.g. laughs)

センタリング理論では、発話に以下のような3つの定義をしている。(1) 定型(finite)、不定形(infinite)を含むすべての節を発話単位とする、(2)埋め込み節以外の定型の動詞を有する節を発話単位とする(Walker 1998)、(3)いわゆる文を発話単位とみなす(Miltsakaki and Kukich 2000a, b)。(1)は発話単位が非常に細かいため談話の展開が見えず、(3)は従属節が無視されるため単位としては大きすぎる。本研究では、埋め込み節はセンターの遷移に直接関係しないと考え、(2)を採用した。日本語も基本的に同様の枠組みで発話単位を決定した。調査期間は、1998年11月～1999年2月で、調査は主に英会話学校の自習スペースで行われた。

2.3. 分析の枠組み(センタリング理論)

センタリング理論は、談話の処理過程において連続する2発話に見られる指示表現の表層の形式選択(名詞/(ゼロ)代名詞)と一貫性について局所的に記述することを可能にする(Grosz, Joshi & Weinstein 1995; Walker, Joshi & Prince (eds.) 1998)。各発話によって更新される中心部は、トピックや顕在性(salience)と同意の段階的な概念で、最も中心にあるものがセンターとなる。

まず、例を見ることにする。

(1) The bike is near the house. It’s expensive.

“it”は“the bike”と“the house”のどちらを指すだろうか。おそらく、“the bike”と答える人が多いと思われる。¹⁴この違いは、記憶の中の顕在性に求めることができる。一般に顕在性の高いものほどトピックになりやすいと言われているが、センタリング理論では、英語の場合、SUBJECT > OBJECT(S) > OTHER (Grosz, Joshi & Weinstein, 1995)という階層性を、センターを決定する際に使用している。同様に、日本語の場合では、(文法・ゼロ) 主題 > 視点 > ガ格 > ニ格 > ヲ格 > その他 (Walker, Iida & Cote, 1994)となる。日本語のセンターの順位は、「格」等の文法的制約よりも主題性や視点の継続などの高次の認知的概念が優先的に働くことを考慮して決定される。¹⁵センタリング理論では、又、センターの遷移に、CONTINUE > RETAIN > SMOOTH-SHIFT > ROUGH-SHIFTという優先順位をつけている。

JACET関西紀要 第7号

1. CONTINUE は、前発話から引き継がれたセンターが次の発話でも同じであることを予測し、この遷移が続くと一貫性が高いと判断される。
2. RETAIN は、前発話のセンターが次の発話で移動することを予測し、SMOOTH-SHIFT が次ぎに続くことが多い。
3. SMOOTH-SHIFT は、前発話から引き継いだ現在のセンターが次の発話で異なるセンターに移動し、新しいセンターが続くことを予測する。
4. ROUGH-SHIFT は、前発話から引き継いだ現在のセンターが次の発話で異なるセンターに一時的に移動する。この遷移が続くと一貫性が低いと判断される。

以下に、遷移パターンを英語話者と学習者と日本語話者を例にとって見てみることにする。

表 2 <英語話者04>^{vi}

発話	Cb(前発話センター)	Cf(次の発話のセンターの候補)	遷移パターン
22. on the way to fight the demons, <u>Momotaro</u> found, he found, oh, he met en ahh a dog.	Momotaro	Momotaro<s>, dog<0>, demons <ot>	CONTINUE
23. <u>∅</u> gave him some food,	Momotaro	zero (=Momotaro)<s>, him(=a dog) <o>, some food<o>	CONTINUE
24. and <u>∅</u> be [P] he be befriended the dog [P]	Momotaro	zero (=Momotaro)<s>, dog<o>	CONTINUE
25. then slowly <u>his</u> entourage grew	Momotaro	his (=Momotaro) entourage<s>	CONTINUE
26. and <u>he</u> also [P] met a monkey,	Momotaro	he (=Momotaro)<s>, monkey<o>	CONTINUE
27. and <u>∅</u> made friends with a monkey as well [P]	Momotaro	zero (=Momotaro)<s>, friends<o>, monkey<ot>	CONTINUE
28. then later on, the group increased until there was also ah [P] hmm [P]	Momotaro	the group<s>	RETAIN

表2より、遷移パターンを見てみるとCONTINUEの遷移が続くことから、一貫性の高い発話であるとみなすことができる。

英語学習者のストーリーテリングにおける指示表現の実証研究：
センタリング理論を分析の手がかりとして

表 3 <初級話者04>

発話	Cb	Cf	遷移パターン
11. <u>Momotaro</u> is looking dog,	Momotaro	Momotaro<s>, dog<o>	CONTINUE
12. <u>Momotaro</u> is looking monkey,	Momotaro	Momotaro<s>, monkey<o>	CONTINUE
13. <u>Momotaro</u> is looking Kiji.	Momotaro	Momotaro<s>, Kiji<o>	CONTINUE

表3は、表2と同様にCONTINUEの遷移が続くことから、一貫性の高い発話とみなすことができる。しかし、一貫性の高さは同時に単調さを生み出す危険性を有する。表2の英語話者の場合には、様々な言語形式(Momotaro, Ø(=zero), his, he)を使用することによってこれを回避しているが、初級学習者の場合、バリエーションは見られず、単調な印象を与える。

一方、表4の遷移パターンを見てみると、SMOOTH-SHIFTやROUGH-SHIFTといった優先順位の低い遷移パターンが頻繁に生じており、表2や表3の発話と比べて、センタリング理論では、一貫性の低い発話であるとみなされる。しかし、注意すべきは、ここでいう「一貫性の低い発話」は必ずしも実感としての「まとまりのない」発話を意味するのではないという点で、遷移パターンはあくまでもストーリーの展開を示す指標として利用されている。

表 4 <日本語話者03>

発話	Cb	Cf	遷移パターン
11. <u>桃太郎</u> はすくすくと成長し、	桃太郎	桃太郎<ハ>	SMOOTH-SHIFT
12. <u>Ø</u> おじいさんの芝刈りを手伝うようになりました、	桃太郎	ゼロ(=桃太郎)<ハ>、おじいさんの芝刈り<ヲ>	CONTINUE
13. するとある日、 <u>1人の旅人</u> がおじいさんのところにやってきて、	おじいさん	一人の旅人<ガ>、おじいさんのところ<ニ>	ROUGH-SHIFT
14. <u>Ø</u> 鬼について話をしました、	一人の旅人	ゼロ(=旅人)<ハ>、鬼の話<ヲ>	SMOOTH-SHIFT
15. そこで <u>桃太郎</u> は鬼を退治するためにおじいさんとおばあさんの家から離れました、	鬼	桃太郎<ハ>、鬼<ヲ>、おじいさんとおばあさんの家<ヲ>	ROUGH-SHIFT

2.4. 分析の枠組みの修正

2.3に挙げた4つの遷移パターン以外に、前発話とのつながりを全く示さない「遷移なし」がある。これは、従来、セグメントの境界を示すものとして調査対象になっていなかったが、学習者の発話の場合には、セグメント内であるにもかかわらず「遷移なし」が生じ、とぎれがちな発話となることがある。従って本研究では、「遷移なし」がセグメント内に生じることを考慮し、考察の対象とする。又、センタリング理論は、計算言語学の枠組みで発展を遂げているため、コンピューターが背負う限界を引き継いでいる。即ち、指示対象は具体的な人・物に限られており、推論によって指示対象と指示詞が関連づけられる間接照応を扱うことができない。しかし、指示詞は、イベントや状況などを指し示すことが可能であるし、間接照応もまれではない。従って、本研究は、コンピューターではなく人手で分析を行う利点を生かし、上記の指示表現も考察の対象とする。

3. 結果と考察

3.1. 発話量

まず、各グループにおける発話量を見てみる。表5は、(2.2)で定義した発話単位つまり、(2)の「定型の動詞を有する節を発話単位とみなす」に基づくものである。例えば、初級話者の平均発話数は19.5節で、学習者のレベルが上昇するほど、発話した節の数が増えることが分かる。英語話者の標準偏差の数値が大きいのは発話者によって発話量の個人差が大きかったことによるが、発話量の個人差は今回の分析に直接影響しないと考えられるので、考慮しない。

表5 平均発話単位数と標準偏差

グループ	被調査者総数	発話単位数(合計)	発話単位数(平均)	発話単位数(標準偏差)
初級話者	10	195	19.5	2.25
中級話者	10	255	25.5	7.17
上級話者	10	278	27.8	5.23
英語話者	10	537	53.7	23.87
日本語話者	10	226	22.6	4.98

英語学習者のストーリーテリングにおける指示表現の実証研究：
センタリング理論を分析の手がかりとして

3.2. 全体の遷移の分布

ここでは、指示表現の出現頻度から、各遷移パターンの分布の比較を行う。話者群の間で、遷移の選択に有意差が認められた($\chi^2=58.599$ $df=16$ $p=0.05$)。つまり、一貫性の構築の仕方が話者群で異なることが示された。

表 6 話者群別の遷移パターン^{vii}

遷移パターン	CONTINUE	RETAIN	SMOOTH-SHIFT	ROUGH-SHIFT	遷移なし
初級話者(10名)	119	20	18	9	29
残差	*3.68	-1.47	*-2.98	-1.08	0.11
中級話者(10名)	117	38	42	23	33
残差	-0.88	0.72	-0.02	1.94	-0.78
上級話者(10名)	110	41	60	28	35
残差	*-3.16	0.72	*2.59	*2.89	-0.96
英語話者(10名)	274	83	97	18	70
残差	1.05	1.45	0.99	*-3.64	-1.41
日本語話者(10名)	107	21	31	17	51
残差	-0.53	*-2.08	-1.31	0.75	*3.63

表6は各話者群10名分を総合した観測度数と(調整化)残差である。まず初級話者を見てみると、CONTINUEの出現頻度が高い(残差3.68)。一方、センターの移動を予測させるRETAINは、有意差は認められなかったものの、他の群より出現頻度が低い。又、滑らかに次ぎのセンターに移動することを予測するSMOOTH-SHIFTの出現頻度も低い(残差-2.98)。これはセグメントを越えてセンターが引き継がれた、つまりセンターの移動があまり生じなかったことを意味し、言い換えると単調な談話展開であったことを示す(2.3の表3参照)。又、うまくセンターの移動が表現できず、場面を飛ばすという方略により移動を避けた例もあった。(2)の7では、鬼の話をしにやってきた村人の存在が無視されており、談話能力がまだ十分に発達していないことがうかがえる。

(2) <初級話者 06>

6. and and the baby was growing up, the healthy boy,
7. and someday the boy [P] was heard [P] the [P] the demon,
8. and er [P] Momotaro go to Onigashima.
9. on the way, the Momotaro meets the dog,

JACET関西紀要 第7号

上級話者では、CONTINUEの出現頻度が低く(残差-3.16)、逆にSMOOTH-SHIFTと ROUGH-SHIFTの選択が多い(残差2.59, 2.89)。この理由としては、speaking能力の向上からセンターの移動が可能となったことが考えられるが、一方で、ROUGH-SHIFTの選択の多さは、センターの移動を十分に明示できていないことを示している。英語話者では、センターの移動が滑らかに行われていることから、ROUGH-SHIFTの出現が非常に少ない(残差-3.64)。

日本語話者では、RETAINの選択が低い(残差-2.08)。これは、前発話と今処理中の発話をつなぐ、英語の冠詞や所有代名詞などにあたる表現が日本語には少ない、もしくは、日本語では使用されないためと考えられる(秋月, 1999参照)。このことは、明示的に先行の発話とつながりを示す語が使用されていないことを示す「遷移なし」で、日本語話者のみ出現頻度が有意に高いこととも関連する。以上より、初級話者から上級話者となるに従ってセンターの移動が可能となるが、学習者のセンターの移動は、まだ英語話者のような滑らかなものには至っていないことが示された。又、学習者の一貫性の構築は、日本語話者とは異なることが示された。

3.3. 名詞と代名詞(指示代名詞を含む)の分布

表 7 それぞれの遷移における名詞と代名詞の分布^{viii}

遷移	CONTINUE		RETAIN		遷移なし		SMOOTH-SHIFT		ROUGH-SHIFT	
	名詞	代名詞	名詞	代名詞	名詞	代名詞	名詞	代名詞	名詞	代名詞
初級	39	80	<u>11</u>	9	<u>24</u>	5	8	10	<u>5</u>	4
残差	*3.24	*-3.24	0.54	-0.54	-0.26	0.26				
中級	25	92	<u>21</u>	17	<u>29</u>	4	15	27	<u>14</u>	9
残差	-0.07	0.07	0.82	-0.82	0.60	-0.60				
上級	21	89	<u>22</u>	19	<u>33</u>	2	17	43	<u>17</u>	11
残差	-0.69	0.69	0.63	-0.63	1.76	-1.76				
英語	38	236	29	54	<u>52</u>	18	31	66	9	9
残差	*-3.94	*3.94	*-3.39	*3.39	*-2.83	*2.83				
日本語	34	73	<u>17</u>	4	<u>46</u>	5	8	22	<u>16</u>	1
残差	*2.77	*-2.77	*3.07	*-3.07	1.30	-1.30				

英語学習者のストーリーテリングにおける指示表現の実証研究：
センターリング理論を分析の手がかりとして

ここでは名詞表現と代名詞表現の選択の分布を話者群別に比較する。^{ix}表7は名詞、代名詞の観測度数と(調整化)残差である。代名詞よりも出現頻度の高い名詞には下線を施した。まず、英語話者に関しては代名詞を好んで使用していることが分かる。CONTINUEやSMOOTH-SHIFTは旧情報をセンターとして受け継ぐため、(ゼロ)代名詞が使用されることは予測されたが、他の遷移においても代名詞を好んで使用しており、RETAINでは代名詞の選択に有意差が認められる(残差3.39)。一方、日本語話者は名詞を好んで使用している。調整化残差より、CONTINUEとRETAINで名詞の選択に有意差が認められる(残差2.77, 3.07)。英語話者の使用と非常に対照的で、日本語と英語との言語差が良く現れている。

学習者群については、名詞を好んで使用しており、その傾向は英語話者よりも日本語話者に似通っていることが分かる。特に、初級話者では、CONTINUEの名詞選択が多く、日本語話者の選択分布と同じ傾向を示している。本来、CONTINUEは、話題のセンターがトピックとして確立していることを示すため、無標で処理労力を要しない代名詞の使用が予測されるが、この初級話者の結果は予測に反している。初級話者では、言語能力の未発達から、登場人物である「おじいさん」と「おばあさん」をgrandfather, grandmotherとそのまま英語に訳している例が見られた。又、日本語の転移から、固有名詞を繰り返し使用する例が多く見られ、その使用は名詞表現の20%にのぼる。このようなぎこちない指示表現の使用は、名詞/(ゼロ)代名詞の選択と状況や場面に対する認知的側面とが結びついていないことを示唆している(2.3の表3も参照)。一方、上級話者では、有意差は認められないものの、「遷移なし」で、名詞を用いた新情報の導入を行っている(残差1.76)。つまり、セグメント境界という場面に対する認知的側面と名詞/(ゼロ)代名詞の選択とが結びついていないことを示す。ところが、英語話者では「遷移なし」に代名詞の選択も多く、(3)のように、名詞(a little baby)と代名詞(they)の使用が見られる。

(3) <英語話者 01>

発話	遷移パターン
12. because inside a peach there was <u>a little baby</u> [P]	なし
13. hmm so because <u>they</u> were really old,	なし

つまり、セグメントの境界を越えて、以前に出現させたセンターを受けるに

は、処理に負担がかかるため名詞がくることが予測されるにもかかわらず、英語話者は代名詞で受けるという方略も用いているということになる。従って、上級話者は認知的側面に関する発達が見られるものの、型どおりの使用に限られており、英語話者のようなバラエティーに欠けていることがわかる。

4. 結論

本研究は、センタリング理論に基づき、遷移の分布より話者群別の一貫性の構築の比較と指示表現選択の比較を行った。結果、初級話者から上級話者となるに従って、センターの移動が可能となることが示された。しかし、学習者のセンターの移動は上級のレベルであっても、英語話者のような滑らかなものには至っていなかった。又、学習者は日本語のような一貫性の構築をしているわけではないことが示された。名詞と代名詞の選択においては、学習者と日本語話者との間に類似性が示された。特に初級話者でこの傾向は顕著であった。上級話者は、セグメント境界と指示表現を一致させることができ、認知的発達をうかがわせるが、英語話者のようなバラエティーは、まだ兼ね備えていないこともわかった。今後は、個別に質的な分析を行い、又、他のストーリーなどと比較を行う必要があると思われる。

参考文献

- 秋月高太郎 (1999) 「訳の語用論－日・英語の照応表現をめぐって－」『日本語学』 Vol. 18 No. 3, 55-65.
- Chafe, W. L. (ed.) (1980). *The Pear Stories*. Norwood: N. J. Ablex.
- Chaudron, C. & K. Parker (1990). 'Discourse Markedness and Structural Markedness (The Acquisition of English Noun Phrases).' *Studies in Second Language Acquisition* 12, 25-41.
- Clancy, P. (1980). 'Referential Choice in English and Japanese Narrative Discourse.' In Chafe, W. L. (ed.) *The Pear Stories*. Norwood: N. J. Ablex.
- Fuller, J. W. & J. K. Gundel (1987). 'Topic-prominence in Interlanguage.' *Language Learning* 37, 1-18.
- Givón, T. (1983). *Topic Continuity in Discourse*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Grosz, B. J., A. K. Joshi, & S. Weinstein (1995). 'Centering: A Framework for Modeling the Local Coherence of Discourse.' *Computational Linguistics* 21(2), 203-225.
- Hartford, B. S. (1995). 'Zero Anaphora in Nonnative Texts (Null-object Anaphora in Nepali English).' *Studies in Second Language Acquisition* 17, 245-261.
- 石崎雅人・伝康晴. (2001). 『言語と計算－3 談話と対話』東京大学出版会.

英語学習者のストーリーテリングにおける指示表現の実証研究：
センタリング理論を分析のてがかりとして

- Miltsakaki, E. & K. Kukich (2000a). 'The Role of Centering Theory's ROUGH-SHIFT in the Teaching and Evaluation of Writing Skills.' In *Proceedings of ACL 2000*.
<http://www.ling.upenn.edu/~elenimi/grad.html>
- Miltsakaki, E. & K. Kukich (2000b). 'Automated Evaluation of Coherence in Student Essays.' In *Proceedings of LREC 2000*. <http://www.ling.upenn.edu/~elenimi/grad.html>
- Walker, M., M. Iida and S. Cote (1994) 'Japanese Discourse and the Process of Centering.' *Computational linguistics* 20: 193-231.
- Walker, M., A. K. Joshi & E. Prince (eds). (1998). *Centering Theory in Discourse*. 327-357. Oxford: Clarendon Press.
- Williams, J. (1988). 'Zero Anaphora in Second Language Acquisition: A Comparison among Three Varieties of English.' *Studies in Second Language Acquisition* 10, 339-370.
- .(1989). 'Pronoun Copies, Pronominal Anaphora and Zero Anaphora in Second Language Production.' In Gass, S., C. Madden, D. Preston & L. Selinker (eds.), *Variation in Second Language Acquisition: Vol. Psycholinguistic issues*. 153-189. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

本研究は、2002年5月26日に同志社女子大学で行われた外国語教育メディア学会関西支部春季大会の口頭発表に加筆、修正を行ったものである。本稿執筆にあたり舟阪晃教授、査読者の方から有益なコメントを頂きました。心より感謝申し上げます。

- i 被調査者の数が少ないと個人のばらつきの影響が拡大され、歪みも大きくなるとの批判もあるが、昔話という決まり切った型の話を題材とすることで、非常に異なる発話は回避できると判断した。
- ii データ収集にあたり桃太郎の話を知っている人のみを対象としたが、英会話学校の先生は、外国人を相手に話すのが職業であり、それが発話に反映されている可能性も否定しきれない。外国人との接触が普遍的な英語話者のデータを採集して検討する余地はある。
- iii 初級話者は自由に語るように言われても話せないため、なじみが深く、話せる題を選んだ。又、統制をとるため、同じ題材を使った。
- iv この現象は認知言語学でいう図と地の分析とも一致する。
- v 「文法主題」は「ハ」でマークされた要素を指し、「ゼロ主題」は主題化された要素を指す。「視点」は、授与動詞「～やる」のガ格や、「～くれる」の二格など話し手の共感がおかれる対象を指す。
- (a) 花子が車を壊して困っていた。
- (b) 太郎が0手を貸してくれた。
- (c) 次の日0₁ 0₂ 食事にさそった。
- (c)の0₁は、「花子」と解釈されるが、それは、(b)の文の「視点」が「花子」にあり、(c)で「花子」に関する発話が連続すると予測されるからである。つまり、上位にあるガ格の「太郎」よりも、「二格」の「花子」がセンターになることから、「視点」は「ガ格」より上位に位置づけられる。
- vi s (subject), o (object), ot (other)
- vii 数値が1.96以上の場合有意な差が認められる。有意差が認められたものに*を記す。
- viii CONTINUE($\chi^2=25.403$ $df=4$ $p=0.05$)、RETAIN($\chi^2=16.377$ $df=4$ $p=0.05$)、「遷移なし」($\chi^2=9.702$ $df=4$ $p=0.05$)、SMOOTH-SHIFT($\chi^2=2.47$ $df=4$ $p=0.65$)、ROUGH-SHIFT(イエーツの修正後 $\chi^2=6.490$ $df=4$ $p=0.165$)
- ix 指示代名詞、ゼロ代名詞を含む。